
正しい雪だるまの作り方

蒼桐隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい雪だるまの作り方

【NZコード】

N3187B

【作者名】

蒼桐隼人

【あらすじ】

大学生のアキは塾の講師のアルバイトをしている。今日も生徒にいろいろ教えていた。けれどアキには特別な生徒がいる。それは以前、後輩だった男で今のアキの彼なのだつた。

(前書き)

雪をテーマにした企画小説です。キーワードで雪小説を検索すると、他の作家さんの雪小説が読めます。

『今日、帰り平氣?』

英語のプリントの余白にそれは走り書きされていた。私はすぐにそれに気付き

「うん、調子いいね!」

と、手紙の差出人に返事をした。

すると彼は一度でその文章を消し、

「先生、辞書ありますか? 僕今日忘れちゃつて」

と、まだ幼さの残る少年の笑みを浮かべた。

私が手元に用意しておいた電子辞書を手渡すと、彼はすぐに目の前の問題に集中した。

私は右の壁にある電波時計を確認してから、授業報告書を作成するため左の机の上にファイルを置き、それを開いた。ファイルは全て青色だが、間違えることはまずない。

スーツの左胸ポケットの三色ボールペンでまず日付と時間、菅居悠紀と書き込んだ。そこにあるのは確かに生徒の名前であり、今の私にとってはかけがえのない人の名前でもあった。

私がそもそも塾の講師のアルバイトを始めたのは、一年くらい前のことだ。

それまで私には短期でしか働いた経験がなかつたし、サークル活動で働ける日は限られていたから、飲食店には揃つて首を横に振らっていた。アルバイト情報誌も見飽きた頃、大学の友人が紹介してくれた。それが、四谷学院だった。

講義の合間に何度か話を聞いて、仕事の内容は知っていた。子供も嫌いではなかつたし、文学部なら教師を目指すのもアリかな、という前向きな考えが私にはあつた。

もちろん現実は理想だけでは駄目だった。

面接を受けて、配属された先は開校したばかりの教室で、ペーペーの私が同じペーペーの職場で働くというのは複雑な心境だった。講師も生徒も十人に満たなかつたから、研修期間の三十コマはなかなか終わらなかつた。それに女の講師は私一人だけだつたから、必然的に室長が不在の時に電話を取るのは私の役目だつた。最初に覚えさせられたのもそれだつた。

失敗は絶えなかつた。コピー機に紙づまりを起こして故障させかけたり、保留ボタンを押し忘れて電話を切つたり。中学受験の算数の問題が分からず、必死に頭を使うこともよくあつた。振り込まれる少ない給料がさみしかつた。

それでも数ヶ月経つて慣れてくると、仕事は楽しかつた。授業で時折聞く、小学生の実状は興味が尽きなかつたし、中高生の悩みや生活は懐かしかつた。人が増えた今でもそう思つ。

突然、電子音が教室中に響いた。曲はレミオロメンの粉雪。たいしたことではないのに、苦笑がもれた。

「授業中はマナーモードにね」

「す、すいません」

彼が慌てて鞄の中を『そぞろ』と探り、角ばつた形のケータイはようやく大人しくなつた。

そういうえば最初のデートで、雪が降つたのを覚えている。映画か何かを見た帰りで、することもないけど離れがたくて。のんびり帰ろうと駅に降りた時。

街は雪景色だつた。

私達はわけもなくはしゃいで、

「雪だるま作ろ！」

と同時に提案した。

人気の少ない公園は、人に見られたくない私にはついついつけだつた。

雪は冷たいのに何故かさらさらしていて、ずっと触っていたかつた。

私が頭で、悠紀が胴体を担当した。積もっている雪だけをかき集めて、玉にしてそれを転がす。それだけなのに私には難しかつた。いびつなおにぎりのような頭は、悠紀が作った胴体の上をゆらゆらと揺れて、最終的に「ぼと」と雪の上に転がつた。

カツカツ悪かった。

「相変わらず不器用だなあ、アキは」

悠紀は私の家の近くにくるまで、ずっとけらけら笑っていた。

悠紀と雪だるまを作ったのも、それが初めてではなかつた。中学の部活の途中。はしゃぎ回つている後輩をまとめられず、私は今日は終わり!と宣言した。

そして後輩も同学年のやつも混じつて、雪合戦らしきものをするのを眺めていた。その時隣にいたのが悠紀だつた。ナマイキで女顔のかわいい感じの後輩。私はその時までそう思つていた。

「先ぱい、雪だるま作つて勝負しようぜ? 大きく作れた方が勝ち。」

私は雪を集めて玉を作り、叩いて固めた。野球ボールくらいの大きさになると、雪をこすりつけて固めた。

しばらくして、悠紀がりんごの一倍くらいの雪の玉を持って戻つてきて、突然吹き出した。失礼なやつだ。

「先ぱい、何やってんの」

「え、雪だるま。作つてるんだけど」

「作り方へんだよ。転がしてかないと、いつまでたつても大きくならないじゃん」

「… そういうえば、そうだね。でも… 雪だるまになればいいんだから、いいの！」

私はそれまで自分のやり方が間違っていると知らなかつた。少し考えれば、わかることなのに。

私は悔しくて、悠紀をつっぱねた。言い返してくることは分かつていたけど、うまい言い訳が思いつかなかつた。

でも飛んできたのは軽口じやなかつた。

「先ばいって、面白いね。俺と付き合つてくれない？」

瞬間、ただの後輩ではなくなつてしまつた。

当時私には好きな人がいて、叶わないことも知つていて、でも想つてはいるだけでよかつたのに。

「先生、できました」

「あ、はいはい。ちゃんと見るわよ」

授業中は誰かに悟られないよう、彼とはあまり話をしないようにしていた。担当ではないし、メールも削除するようにしていくけど、この時間はじきじきする。

生徒と親しくなりすぎたら、解雇なのだ。たとえ理由が何であろうとも。

「先生、この部屋暑くないっすか？」

「仕方ないのよ、変な位置にエアコンがついてるから」

私は椅子から立ち、教室の入口のあたりの壁にあるエアコンのボタンを押した。温度と風力を適当に下げる。
ふと外を見ると、雪がちらついていた。

何故だろう。今もある頃と少しも変わっていない気がした。
いや、きっと私は分かつてはいる。教師には向いていないこと。
生徒のしたことやその他の情報を他人に話したりしてはいけない
のに、漏らした。何より生徒と付き合つてはいる。致命的だ。

私が作る雪だるまも、いつもぶわこくで、かっこよくない。要領が悪いのだ。いつも、いつも。

授業もチャイムが鳴つて、次回の授業で使う確認テストを作り、月別報告書を書くと、仕事を終えた。

塾は何かのビルの三階にある。エレベーターで一番下まで降りると、悠紀が待っていた。

「今日は早かったな」

「生徒がいい子ばっかりだからね、やりやすかったの」

私達は同時に笑った。

そして駅までの道を並んで歩いた。手はつながない。言い訳できない状況になってしまふから。

でも、本当はもちろん繋ぎたい。それが、私の気持ち。

「悠紀、先生は…須藤先生は先生を辞めるよ」

「え、いいの？」

悠紀は驚いたような、でもどこか嬉しそうな表情をした。

ちらつく雪は悠紀の髪について、溶けていく。

「雪だるま、作ろ」

最初の質問には答えずに、私は駅の方へと走る。

コンクリートに積もつた雪は集めやすくして、今までで一番つまみできそうな気がした。

「本当に、いいの」

「新しくやりたいこと、見つけたいの」

悠紀は雪玉を転がしながら私の言つことを聞いていた。私は最後にこうつけ加えた。

「ただし、辞めるのはみんなの受験が終わつてからー。須藤先生はそこまで自分勝手じやないよ?」

悠紀はまたけらけらと笑つた。

出来上がった雪だるまは雪が少ないため、小さかった。でも頭は落ちなかつたし、丸い雪だるまになつた。

それは今まで一番、かわいい雪だるまに私には見えた。

(後書き)

初の短編で、全て携帯執筆でした。きつかったです。それでも読んで下さった方が何かを感じてくれていたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3187b/>

正しい雪だるまの作り方

2010年10月8日15時20分発行